
魔獣使いは我が道を行く

ポケモントレーナー リリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣使いは我が道を行く

【Nコード】

N8119X

【作者名】

ポケモントレーナー リリア

【あらすじ】

神埼玖惹は、いつものようにポケモンを売買している研究者達をばこばこにしていたが、一人の研究者に銃で撃たれてしまう。一緒に戦っていた相棒達に分かれを告げ死んでしまい次に目覚めたときには、伝説のポケモン「アルセウス」に出会い転生の話を持ちかけそれを受け入れた。彼女は転生し「リボーン」の世界へ…。

紹介（前書き）

リボーンとポケモンのコラボはどうだろうと思い書いてみました。

紹介

名前 神埼 玖惹

フリガナ カンザキ クジャ

性別 女

年齢 ツナ達と同じ

身長 165センチ 体重 50キロ

一人称 私

誕生日 7月7日

性格 無表情がいつもの顔で、心を許した人にしか笑わない

髪の色 黒

目の色 青

髪型 ショートだが耳の部分だけ鎖骨ぐらいまでの長さ

着る服 白い服や、王冠の入ったプリントTシャツを好む。

必需品 モンスターボールに入ったポケモン

携帯 財布 ベージュのポーチ ナイフ（護身用）

手帳

備考 ポケモンと共にやってきた転生者

ポケモンを「家族」または「相棒」と呼び、傷つける輩やかからは容赦ない制裁を下す

また人と関わることを嫌う

そのため周りの人から孤立しがち

現在は並盛から並中まで十キロ離れたところにある廃屋に住んでいる

（ちなみに学校へ登校する時はサーナイトの持つ技「テレポート」で登校する

着場所はトイレなど）

一応武器はあるが、基本的に魔獣を使って戦う

一言

「私と関わるなら精神科へ行くことをお勧めするよ」

名前	清水 由香		
フリガナ	シミズ ユカ		
性別	女		
年齢	ツナ達と同じ		
身長	152センチ	体重	49キロ
一人称	ウチ		
誕生日	11月11日		
性格	優しい		
髪の色	黄色		
目の色	茶色		
髪型	ショート		
着る服	水色やピンクといった服を着る たまに奇抜な服を着る		

必需品 代々清水家に伝わる短刀「雪羽」ゆきはね

携帯 財布

備考 トリップ者

裕福な家庭で育った

現在はマンションで独り暮らし

神様からは最強設定を特典としてもらっている

玖葱のことを邪魔ものとして嫌っている

一言

「私に嫌いな人なんていません。皆いい人なんです」

注意事項

・普通は4つの技しか使えませんが、この小説では秘伝技や技マシ

ンで覚えられる技を使います。

- ・レベルは無限大です。なので無限大に強くなります。

進化は主人公の見極め？となります。

石や交換などの特殊進化は、都合上違った形で進化されます。

- ・主人公は都合上6体以上のポケモンを使います。

- ・ポケモンの呼ばれ方が途中で変わってきます。

- ・リングの炎とポケモンの技を掛け合わせたオリジナルの技が出てきます。

* 注意事項は追加あります。 *

紹介（後書き）

玖惹の手持ちポケモンはのちほど公開します。

とりあえず、私が実際に使っているポケモンと玖惹が使いそうなポケモンを出そうと思います。

＼質問コーナー＼

皆さまの好きなポケモンは何ですか？

私は、サザンドラとブラッキーにランターンなどが好きです。

ではまたいつか投稿をしたいと思います。

今いる世界にサヨナラを（前書き）

そう言えば伝え忘れがありました。

ポケモンは玖葱の使うポケモン（控え軍も合わせて15匹）しか出てきません。

玖「すいませんね…作者がバカで」

…主人公こんなドSでしたっけ！？

玖「こんな作者はほっというて本文をどうぞ」

今いる世界にサヨナラを

自分が、死ぬ時は誰かに殺されてしまっただろうと感じていた。

いや…病気で死ぬこともあっただろうが。

物心ついてから、私は悪さばかりしてきた。

人のポケモンを強奪、建物を自分のポケモンを使って破壊はもちろんのことで…

人に対しての暴言は毎日のこと。

よく、自分のポケモンにも悪口とか言っていた。

だからこんな自分に友達はいないし、近づくことすらなかった。

だからこんな自分にもいつかは、天罰が下ると思っていた。

で、今私はその危機に直面している。

今日もいつも道理、自分のストレス解消のためにポケモン売買や虐待、

実験をしてるアジトに堂々と私の相棒達と正面から乗り込み研究者たちを制裁していた。

オリに入っていたポケモンたちを解放をしようとしたところで、まだ気絶していなかった研究者が…

銃で私の手持ちポケモンの一匹であるハピナスのアロエを撃とうとしていた。

それに気付いた私はアロエを押しつけ撃たれた…ッというわけで。

「ハピィッ！」

今、アロエに治療されているが傷口はなかなか消えないのが自分でもわかる。

「うるさい…もついいよ。直らないから」

「ピー！」

嫌だとも言うふうにやめようとしな。

アロエの目からは大粒の涙がボロボロ私の腕に落ちる。

なんで私なんかのために泣くのか理解しがたいよ。

アロエのほかに、エネコとか、サザンドラのタナトスとか…

何でそんな泣きそうな顔で見るのさ。

「…泣くやつは…嫌い…だよ」

赤く染まった手でアロエの目を触ると、綺麗なピンクの肌が血で汚れてしまう。

「…私のために泣く奴はもっと嫌いだ」

ああ、もう眠い。

死ぬ時は走馬灯が見えるとかいうけど全くもって見えないし。

もう、耳まで遠くなってきた。

…でも、

「君達は相棒であり家族だから…特別に許してあげるよ」

私が初めて認めた相棒達よ。

ごめんなさいは言えないけど、

「私は…幸せ…でした…！」

感謝だけはしてあげる。

今までこんな私といてくれてありがとう。

そして

サヨウナラ

私が最後に見たのはアロエとダークとエネコの泣く顔。

ああこれでいいや…次に会うことはないよね。

もう私を忘れて、幸せになってくれることを願うよ。

今いる世界にサヨナラを（後書き）

主人公は基本的、最終進化を遂げたポケモンにニックネームをつけます。

なので、文中に出たエネコは、名前はまだつけられていません。

初めまして、行ってきます

私が目を開いて思ったこと…。

何もない。

ただ真っ白な世界が広がっている。

何処を見ても、白、白、白。

もしかしてここは噂の死んだ人が来るところなのだろうか？

地獄？ それともあり得はしないけど天国？

『ここは異世界の狭間』

「は？」

頭の中で響く声。これは一部のポケモンが使えるテレパシーだ。

私の目の前が暗くなったので視線を上げると、

そこにいたのは細くしなやかな純白の身体、

宝石のようなパーツが埋め込まれた金属的な質感の装飾状部位は金色で、

たてがみ状のパーツが頭部にあり4足歩行で白馬を思わせるシルエットの姿を持つポケモン。

「伝説のポケモン様であるアルセウス様を拝める時が来るとは思いもしませんでしたよ」

『フフ…初めましてだ。玖惹よ』

「あなたのようなポケモンがこんな私にどんな御用で？」

『玖惹よ、そなたは死んだのだ』

「…いきなり何？ そんなこと分かってるよ」

『そなたのおかげで組織が壊滅し事件は解決した。』

そなたの犠牲とともに…』

「ふーん…で？」

『我はそなたを気に入っている。』

そなたが死んだとき我は悲しんだ』

「…一度ポケモン専用の眼科へ行けば？　それが精神科にいったいで」

話しが繋がっていないよ？

何が言いたいのかな？

『なあ、玖惹よ』

「何？」

『違う世界で生きなおさないか？』

「…は？」

このポケモンとんでもない爆弾を落としたよ。

「この私が？　生きなおす？　理由を聞かせてほしいな」

『我がそなたを気に入ったからだ』

そんな理由？　つと言おうとしたがアルセウスはなかなか私から視線を外さない。

『我はそなただからこそ生きてほしいのだ』

私だからこそ？

「私だからこそ？　…でもさ私なんかを転生させても良いな訳？」

『問題ない、我は神の存在だから作るのも壊すのも我が決めること』

「じゃあ、私とその新しい世界でその世界を壊そうとするのなら？」

『そなたは、悪を壊しても世界を壊さない』

「知ってるような口ぶりだね」

『知っているからな』

アルセウスが笑っているように見える。

まるで、親友と話しているような気持ちになってくる。

…まあ、別に新しい世界で気ままに暮らすのも悪くないね。

「いいよ。貴方の願い聞きいれるよ」

『そうか。では特典も入れよう今頃アイツも説得をしているところだからな』

説得？ 誰を。 まあ良いけど。

『さて…そろそろ別れの時だ』

「ふーん、じゃあまたいつか会えたらいいね」

『そうだな』

私の体がだんだんと透けて薄らいでいく。

どんな世界に行くか分からない。

どんな特典がつくかわからない…けど。

「ありがとう…アルセウス」

『そなたに数多くの幸があることを祈ろう』

まあそれなりに頑張って次の世界を、私なりに楽しんでくるよ。

起きたらそこは…

「…なにこのボロボロの状態」

目を開けると、視界に入っ たのは荒れ果てた部屋。

窓は割れて破片がそこらに散らばっており、カーテンは破かれている。

テーブルはもちろん照明も粉々に砕けている。

無事なものと言えば、今自分が寝転んでいる黒い革製のソファだけ。

まさかアルセウス… 転送する場所間違えた？

「…まあ、別に豪華な家に送られても迷惑なだけだし」

ゆっくり身体を起して体の動きを確認するでしょう。

指を動かし腰を捻る、立ち上がって屈伸。

で、首をバキバキと回す。

よし…死後硬直とかしてない。

服も血だらけになってない、ほつれも穴も空いてない…得した。

「完璧生前のまんまだね」

次は所持品の確認。

パーカーの内側にナイフが10本ある。

…殺人鬼扱いしないだね。これはあくまでも護身用だから。

てか本当は、ナイフじゃなくてギロチンを使って戦うからね。

まあ、今は手元にないけど。

で、パーカーのポケットに財布と手帳。

所持金？ まあ大体10万ぐらい入っている。

手帳は、その日の日記を書いたりしている。

次に腰の方を触った時に気付いた。

「いつも」の感触が…ない。

ない…ボールホルダーが、モンスターボールがない。

あいつ等がない。

とたんに体が凍りつくような感覚がする。

「…冗談きついよ、これ」

思わず両手で顔を覆う。

うん、悲しい。あいつらがいないとなんかさびしい。

「うあー…」

思わず涙をこぼしそうになった。

すると何かが私の目の前でガシャンと落ちる。

覆っていた手を離し、落ちてきたもを見てみると、

………えっ なになになに

目を見開き、思わず後ずさる。

「嘘……だって……ええ!？」

うまく言葉が出てこない。

だってそこにあるのは

私のモンスターボール。

とりあえず確認のため9個のモンスターボール全てを投げる。

「ギャオオ！」

「ミイー！」

「え、チヨ……ギャアアアア……！」

出てきたと共に、私に飛びついてくる顔なじみのある皆。

まずい…圧死を迎えそうだ。

「ハピッ！」

「グルオオオ！」

ハピナスのアロエとトドグラが私の危険を感じ取ってくれたのか、

他のポケモンに離れるように指示する。

また、死ぬことになろうとしたよ…危ない危ない。

落ち着いたところで皆を見る。

皆泣き顔や心配顔でブツサイク。

うん、かなり不細工だ。

「酷い顔だ、ね」

思わず声が震える。

顔が熱くなり、涙が出てくる。

皆も不細工だけど、自分も不細工だ。

「特典って…これのこと、だったんだ」

もう、嬉し過ぎて…言葉が出ない。

気前がよすぎだよアルセウス。

「皆、大好きだ！」

その瞬間、また皆が泣きながら飛びついてくるが、

私もまた泣きながら私の「家族」を抱きしめた。

*

「…さて、涙も収まってきたしこれからの事を考えよう」

一番聞きたいのはここはどこなのかということ。

何かヒントになる物ないかなーっと思っていると、

「ミィ」

「…何、エネコ」

エネコが、紙切れを口でくわえている。

何、いつの間に？

そう思い紙切れを受け取って広げてみる。

『この手紙を見ていることはきつと無事に別の世界へ行けていることだろう。』

そなたの情報はすべて前の世界から引き継いである。

だから、そなたが情報屋として活動していたこともそのままだ。

そしてこの世界ではそなたの思っていることとは違つかもしれない。

ポケモンたちはきつと異端扱い、魔獣と呼ばれる可能性があるだろうがそなたなら大丈夫だ。

そなたを信じる「家族」と共にそなたの思う道を歩けばいい。

最後にこの世界でも学校はある。

そなたは中学生だから学校へ通う義務がある。

並盛という中学校だ。

読み終わったら今から行くように。

健闘を祈る』

パソコンで打たれたかのようにきつちりとした文字。

差出人は書かれてはいないが、私には分かっている。

紙切れを折りたたみ手帳にしまいこむ。

「学校ね」

まあ、中学生だけど前の世界不登校気味だったし。

いじめっていうのは無かったけど、何か浮いた感じがしてたからなー。

ま、いつか。

それに情報屋してたのも引き継がれてたのか。

まあ、お金ないとこの廃墟に暮らせないからありがたい。

てかところで……、

「今何時？」

まだ7時ぐらいだね。

「じゃあ、大丈夫か」

とりあえず、制服が何処にあるのか気になる。

「ハピ！」

「…何処にあったの？」

いつの間にかアロエが、制服を持っていた。

「まあ、いいや。ありがと」

制服を受け取り着替え始める。

女子用だよもちろん。

何？

男子用じゃないのって…どこぞの男装少女だよ。

「じゃー行きますか。皆戻れ」

皆素直に元に戻るが、

「ミィ」

「何？ 早く戻って。捨ててるよ」

「…ミィ」

エネコだけは戻らずに私の足元によりすり寄る。

めんどくさいな。

「もういい…行くよ」

「ミーン」

あきらめて、エネコと共に学校へ行くことにする。

まあ、途中でどこかに隠して置いとくか、無理やりにも戻すけど。

起きたらそこは…（後書き）

ちなみに主人公は、リボーンを知りません。

所で何かおかしい部分がありますね。

主人公答えてください。

「紹介で学校に登校する時はテレポート使っんじゃないのって質問が来そうだからこの場を借りて答えるよ。

テレポートは一度来たことある場所に行けるからね。

並中はまだ行ってないからテレポートでいけないのさ」

主人公ありがとうございます。

学校

職員室前

「失礼しまーす。今日ここに転校することになった神埼ですけど…」

「おお、君かもうすぐ授業が始まるから一緒についてきてくれ」

「わかりました」

校門にはいる前にエネコをボールに戻し、学校に入ってきたよ。

まあ、かなり無理やりな感じだったけど。

え？ どうして学校までの道のりを知ってるのって？

…それはあれだよ。

同じ制服を着た生徒の後をこっそりと付いていったからさ。

断じて言おう。

間違ってもストーカーなんてしてないからね。

「じゃあ、呼んだら入ってきてくれ」

「はい」

ああ、退屈…。

メンドイな学校。

「神埼ー、入ってこーい」

がらりと無言でドアを開ける。

「転校生の神埼玖惹だ。」

神埼、自己紹介しろ」

黒板に私の名前を書こうとするも、漢字が分からなく手が止まっている。

まあ、この漢字はあまり知られていないから無理もない。

仕方ないので、自分で書きますと言い漢字を書いていく。

書き終わった後、チョークを置き前を向きご挨拶。

「…えー、神埼玖惹です。」

名前の方の漢字が読みにくいと思いますが、玖惹と読み、玖に惹きつけるようにという意味です。

まあ後は、静かな方が好きなのであまり大きい声で騒ぐところは苦手です」

…これでいいのか？自己紹介。

なんて言う突っ込みが聞こえてきたが聞き流す。

っていうか、さっきから私を見てガンくれているこの不良は誰？

銀髪ってまさに不良だし。

「えー席は、山田の隣の席だ。山田、手を挙げる」

「えー!? あ、はい」

ああ、あそこね。

すたすたと無言で歩きそのまま座る。

「えーでは、HRが終わる」

席につき丁度HRが終わる。

すると、私のまわりに女子が群がる。

「何処から来たの？」

「趣味は？」

「恋人いる？」

などなど、さまざまな質問がマシンガンのように飛び交う。

「……………」

うっとおしいな。

うるさいの嫌いってさっき言ったはずだよね。

まったくめんどくさい。

しばらく押し黙っていると、別の教師が入ってきて次の授業が始まった。

*

SIDE 由香

今日ウチのクラスに転校生が来るらしいけど、ウチの知っている原作ではそんなことはなかった。

つまり…トリップ者の人かな？

だとすれば神様から聞けばいいよね？

『神様？ 聞こえてるよね？』

『ああ、アイツは転生者だ。しかし俺は転生はさせていない…。
多分別の奴が転生させたんだろっな』

『え？ 何か能力貰ってる？』

『いや、何もねえぞ。…お、由香こいつは大丈夫だ』

『何が大丈夫なの？』

『こいつは原作を読んだことがない。つまり…この世界を知らない』

じゃあ、気にしなくても良いのね。良かった。

でも…邪魔をする人だったらどうしよ…。

『じゃあ、オレは戻るな』

『ありがと、神様』

『オウ！ がんばれよ』

じゃあ、早速獄寺くん達のところへ行かないと…。

S I D E E N D

*

昼休み

とりあえず屋上へ行くと誰も来ていなかったので、腰につけているボールを投げる。

出すのはエネコだけ。

…なぜエネコだけかって？

もし仮に他のポケモンを出すとしても…。

私の持っているポケモンは、ドラゴンや虫っぽいポケモンしかい

ない。

後、不定形なポケモンもいるが。

ポケモンのことを知らない人から見れば叫んで逃げ出すだろう。

しかし比較的エネコは猫として見られるので、怖がれる事はないだろうからという理由である。

「ミーン」

「いきなり何？」

すると出てくるなりいきなり私の肩へと乗る。

なに？ そんなにさびしいの。

「ほら、早くご飯食べて」

「ミーン」

エネコは、私の持っている相棒達の中で一番育ち盛りでありそして一番の甘えん坊。

まあ、私にした良ただウザい駄々っ子みたいなもんなんだけど。

ドカアアアン

「…なにこの音？」

「ミーン…」

もそもそと卵パンを食べてたら爆発音が後ろから聞こえる。

チラリと後ろを見ると、さっきの銀髪君と……後は銀髪君と対立するように立っている三人。

一人は、教室にいた茶髪の背の小さい女子。

名前はわからないな…。

結構周りからモテそうな顔立ちをしている。

次からは、「ちび女」で呼ぶことにしよう。

で、もう一人は……ススキ色の髪が逆立っていて、

額からオレンジの炎を出してるのが特徴の熱血な男子。

なんか、パンツ一楮になってるけど警察に電話した方がいいのか？

それに額から炎出してるし…熱くないの？

まあいいや、命名…「熱血君」にしとこう。

最後は、黄色いおしゃぶりをつけた赤ん坊。

片手には銃を持っている。

命名はそのまま「赤ん坊」でいいや。

銀髪君が火のついた大量のダイナマイトを出し、投げていく。

それを熱血君が素手で消していく。

「わー、スゴ…！」

思わず、目を見開く。

さらに「三倍ボム」っと銀髪君が言いダイナマイトを取り出すが、指が滑りダイナマイトを自分の周りに落としてしまう。

そのまま爆発 ッと思いきや、

熱血君が一つ残らず消していく。

「全部消した。あ、銀髪君が土下座し始めた」

良く分からないけど熱血君に、忠誠的なことを誓っている。

ちび女には敵意をむき出しにしてるけど。

そのあと不良がやってきて熱血君に手を出そうとしていると、

銀髪君がキレてダイナマイトを投げていく。

ドカアアアン

本日二回目の爆発。

「面白そうな人たちだなー…」

つと、楽しそうに見ていると赤ん坊がこっちを見ていることに気付いた。

だが私は、気付かなかったふりをしてそのまま後ろを向く。

さて、次はどうなることやら。

学校（後書き）

主人公が、いつの間にか変な命名をしています。
可笑しい…こんな設定は無かったはずなのに。
ちなみにちび女は清水由香のことです。

自殺志願者

「神崎さん、すごい！」

「清水さんと対等になってる」

今体育の授業で、バスケをしている。

私はこれでも運動はする方だから結構スタミナがある。

今ちび女がシュートの道を阻みなかなか打てない。

仕方ないので、ダンクしながらドリブルですり抜ける。

動きについていけずそのまま立ち止るちび女。

ガコオン

ボールをスローインすると、周りの女子から歓声上がる。

…もう帰っていいかな？

*

SIDE 由香

「…何、アイツ」

運動能力がウチよりもあるじゃん。

何気に生意気…！

「…そういえば、武が自殺する日って明日？」

どうしょ…止めた方がいいかな？

……いや、原作はこのまま変えないで行こう。

それに原作を知らないアイツも

「邪魔はできない筈だしね」

*

次の日

「自殺ねえ……」

私はぽつりと呟く。

先ほど同じクラスメイトの山本武が自殺をするということであつた。クラスの皆で止めに行っていた。

え？ 行かないのって……行くわけないじゃん。

私はね、めんどくさいの嫌いなんだよ。

それに死ぬのって楽じゃないし……。

自殺を止める権利は無いし、彼にも止められる権利は無い。

まあ、言い方を変えれば

助けない権利もないってことだね。

止めはしないが助けはする。

…矛盾してるしてるような気がするが気にしない。

「準備は良いね…クレメンス」

「ルー…」

女性のような体つきをし、胸背にはピンク色をした逆三角が生えたポケモン。

種族名はサーナイトで、名前はクレメンスを出しスタンバイしている。

え？ 今どこにいるのって？

今、女子トイレに潜んでるんだよね。

で、ここからなら屋上がよく見えるんだ。

今は窓からさわやか君（山本武）とクラスメイトが見える。

後おまけでちび女も熱血君と一緒に止めようとしている。

あ、熱血君とちび女がさわやか君と共に落ちていく。

が、いつぞやのパンツ一楮状態になり、ちび女とさわやか君を助ける。

なぜか頭から、バネのようなものをはやして。

しかし、二人を守っている熱血君だけで着地するのは無理がある。

なので、さりげなく念力を使って着地させることに。

「クレメンス、念力」

「ルー」

急降下していく三人を念力でゆっくりとおろしていく。

「終わった？ 御苦労さま」

「ルー」

頭をなでるとクレメンスは嬉しそうに頬を赤く染める。

「じゃ、帰ろうか」

「ルー」

クレメンスをボールに戻し、家に帰る……あ。

「何か話してるみたいだから、近くに行って聞いてみよう」

*

近くに行くとばれるので校舎の角に身を寄せる。

ちび女が大声で叫んでいるのが聞こえた。

「……………死んじやったら、終わっちゃうんだよ？

何にも出来なくなるし、誰にも会えなくなるんだよ？

それでもいいの!?

死んだら何もかも全部…! 終わっちゃうんだよっ!!

……………もう……………もう二度と、こんなバカなことしないで!!」

「…人格破綻者があのセリフ聞いたら笑い飛ばすだろうね」

熱血君達には聞こえない小さい声で呟く。

え? 人格破綻者って?

人格破綻者、名前は…クロソラレイ黒空零。生前の世界でよく一緒にいた悪友の男子。

性格は、純悪、鬼畜、腹黒で作り笑顔を良くする奴。

ポケモンを使って殺人的なことをする人物だったりする。

で、手持ちがポケモンはタイプとかが偏っているけど、

技の威力とか素早さでよく相手を打ち負かしている。

「……まあ、もう会えないけど」

今どうしてるかな？

まあ、別にさびしくはないけど…。

そろそろ行こう。

その後、ちび女はさわやか君と仲良くなったとさ。

自殺志願者（後書き）

クレメン스는ラテン語で「慈悲深い」の意味です。
玖惹はかっこいい外国語や思いつきでニッケネームをつける子です。

赤ん坊

いつの間にか夏休みが終わり、私は給水塔の裏でエネコとぼーっ
としていると、

「まだ少し暑いねー！」

「眺めが綺麗なのな！」

「オレ、屋上来るの初めてだよ」

「十代目にはもっと相応しい場所があると思うんですが……」

……………うるさい人たちが来たな！。

帰りたいなー…でも、何か気まずいな。

仕方ない…このまま、熱血君達が去るのを待とう。

寝ながらの体制で熱血君達の話聞くことにした。

*

「ファミリーのアジトを作るぞ」

別に熱血君の家でいいだろう、と思う。

息を押し殺し、気配を薄め、身じろぎ一つせず、見つからないようにしている。

エネコも私と同じようにじっとしている。

そのおかげか誰も気づいてはいない……はず。

「場所は学校の応接室だ」

「え!？」

赤ん坊の言葉に、ちび女が批判的な声を上げる。

それに、立ち上がって屋上を出ようとしていた熱血君が振り返る。

「どうかしたの？ 由香ちゃん」

「知らないの!？ 応接室って言えば」

「何でもねーぞ。 さっさと行きやがれ、ダメツナが」

何かを言いかけたちび女を無視して、赤ん坊は熱血君を蹴り飛ばした。

あれ？ 赤ん坊にあんな力あつたけ？

私の考えをよそに赤ん坊は扉を閉め、屋上には赤ん坊とちび女、そして隠れている私とエネコの三人と一匹だけになる。

「リボン君！ 応接室に誰が居るのか分かってるの！？」

「あたりめーだぞ」

「じゃあなんで！！ 恭弥相手じゃツナが……！！」

「平和ボケしねーためのトレーニングだ」

激情と共に話すちび女と、淡々と話す赤ん坊の会話を聞く。

なるほど… 赤ん坊の名前はリボンね。

覚えところ。 ちょっと要注意人物として。

「さっさと行かねーとツナがやられるぞ」

赤ん坊はちび女を追い立てるように言う。

途惑いの表情を見せたちび女だがそれも一瞬のことで、

すぐに熱血君を追って屋上を後にした。

「給水塔の影にいるやつ、出てこい」

がらりと雰囲気を変えた赤ん坊。

その言葉に軽く息を？んでしまう。

この赤ん坊…ただ者じゃない。

給水塔で寝転んでいた体を起こし、エネコを肩に乗せはしごを使
つて下りる。

「聞くつもりはなかったんだけど…」

本当に…偶然だと思う。

給水塔の上で昼寝してた…いやしよとしたただけだし。

「オメー何者んだ」

「…何者って言われても…」

並中生だよ。

あれ？他にポケモントレーナーとか破壊魔の肩書もあるけど…
言わない方が身のためか。

「そういえばあの時もいたな」

「あの時って…銀髪君の時の？」

「そうだぞ」

へー、やっぱり顔覚えられてたのか。

ま、別にいいけど。

「まあ、そんなことはどうでもいいけどな」

どうでもいいなら喋るなよ。

「用がないなら私は帰る」

「そうか」

こうして屋上を去った。

この時に赤ん坊がニヒルに笑っていたのは知る由もなかった。

赤ん坊（後書き）

ヒロイン（由香）が雲雀さんを名前で呼んでいますね。
ちなみに玖惹は雲雀とはあまり仲良くなりません。

まあ、実力とか見せていませんし…。

明日も更新予約をさせていただきました。

この話は実は5月ごろから構成されていたものです。
編集をしたりしてちよくちよく出しています。

体育祭

この学校おかしいんじゃない？

そう、むさ苦しい講堂の中で暑苦しい演説を聴いていて思った。

……………体育祭、明日だよな？

普通、もっと前、それこそ夏休み前から準備しない？

なんで皆当然のように受け入れている？

私がおかしいんですか？ 私の持つ常識は常識ではないと？

体育祭の前日である今日、それぞれの団は団結式を行っていた。

と、そんなもやもやとした感情を吹き飛ばすように、講堂に大きな声が響き渡った。

「オレは大将であるより兵士として戦いたいんだー！！！」

講堂が静まりかえる。

別にそんな大声で言わなくてもいいんじゃないの？

その後、笹川了平と銀髪君のかいあって、熱血君が総大将となった。

*

「あ、熱血君たち…熱心だねー練習」

川沿いの道を歩いていると、土手で棒倒しの練習をしている熱血

君たちの姿が…。

…銀髪君と笹川了平が喧嘩していて、

熱血君の乗っている棒さわやか少年しか支えていないけど大丈夫なのあれ？

「ツナ！ 頑張って！」

応援だけですか、ちび女。

あ、熱血君落ちた。

なんかこのまま水に落ちて風邪をひくなんて言うことは、不憫なので助けようか…。

ボールを取り出し投げる。

「クレメンス、念力」

「ルウー」

ピタッと宙に熱血君の体は浮かんでいる。

「え！？ 何これ！？」

「そのまま、土手におろして」

驚く熱血君をよそに、ふわふわと浮かびながら土手におろす。

「さて…帰るか」

クレメンスをボールに戻し自宅に帰った。

「たけしーっ！！！」

「清水さぁぁん！！！」

悲鳴のような声援を上げる集団を少し離れた場所で眺める。

「……………はいはい、頑張れー」

黄色い歓声に掻き消されるまでもなく、

まず届かないであろう大きさと、なおかつ面倒くさそうに言うてみる。

次は、「借り物競走」か。

さっさと終わらせて帰りたいよ。

たしか、1年が私と、ちび女と2年2人で3年2人であってたっけ？

あー、めんどくさい。

*

「では、位置についてー、よーい……」

パン

空砲が鳴り響く。

やる気もないし、だるいけど……ちび女にだけは負けたくないから走ろう。

今、トップで独走中。

カードの内容は……、

『ピンクの猫』

こんな猫見たことある。

まさか、エネコを出せと…。

「仕方ない」

裏校舎に猛ダッシュ。

「あ、あの神崎さ…」

今呼ばれたような気もするけど、気にしない。

「エネコ」

ボールを投げ、エネコを出す。

「ミーン」

「行くよ、時間ないから」

エネコを抱き上げそのままゴールに走る。

『ゴオオオオオルツ！！ 1ーA神埼玖惹選手！』

見事条件の借り物を持ってきました！』

あー、なんて疲れる。

屋上行こう。

*

「ちやおッス」

出たー！

黄色い赤ん坊。

「…やあ」

「お前に用があつてきたぞ」

…まさか。

「借り物競走の時の裏校舎のあれはいつたい何なんだ？」

「…」

「うち、見られていたか。」

「油断していた。」

「昨日の時も魔獣を出していたしな」

「昨日の…って見てたの？」

「というかやつぱ「ポケモン」じゃなくて「魔獣」て呼ぶんだね。」

「余計な呼び方されるよりはマシだけど…。」

「オメーはいつたい何者だ」

銃を向け問いかける赤ん坊。

…別に邪魔する気もないし、あれだよ。

ただ普通に暮らしたいだけなのに。

「昨日の奴も、今さっきの奴は今は言えないけどこれだけは言っとくよ。」

絶対に君たちの邪魔や敵になることだけはしないから。

昨日のポ…魔獣を使って沢田を助けたのは気まぐれさ」

……無言。

どうにかしてほしい、この状況。

「……そうか」

そういつて、銃を下す。

話を通じた。

よかった…。

「じゃあ、私はこれで…」待て「」

まだ何か？

歩くのをやめ、後ろを向く。

「神埼玖惹、オメー…ツナのファミリーに入んねえか？」

ファミリーって何？

「…考えとくよ」

てか、もう出番ないから家に帰っても大丈夫だよな？

棒倒しが面白いとか、クラスの人たちは言っていたけど私はもう眠いからね…。

やる気もないから帰らせてもらっつよ。

助けてみた（前書き）

今回はオリキャラが登場いたします。

（後から重要なキャラになります）

玖「読んでくれてありがとう。」

お気に入り件数が5件以上超えたから作者はテンションが上がりまくっています。

…まさかこんな「それ以上言わないでください!」「…っち」

舌打ちですか!?

玖「では、『助けてみた』のお話をどうぞ」

助けてみた

「エネコ、あまりはしゃがないで」

「ミィ…」

夕飯の買い物をしに並盛の商店街へと続く道を歩いている。

買ってもすぐにタナトスとエネコが、よく食べるので冷蔵庫の中がすぐ空になってしまう。

「はあ…これじゃあ、早くもお金が底をつきそう」

やばいな…お金が底をついたらどうすればいいのさ。

情報屋もそんなに多くの依頼とかこないからあんまし稼げてないし…。

中学でバイトとかできたっけ。

というかポケモンバトルがあつたらすぐにお金が手に入るのに…。

「…って、エネコどこいった？」

まだ近くにいるよね。

まったく、めんどくさいことを。

「エネコ」

ドォォン…

何か爆発するような音が誰も使われていない無人の倉庫から聞こえてきたので、

倉庫の中へと踏み入れる。

まず視界に移ったのはエネコと…一人の少女が倒れており、

エネコはそれに寄り添うように一緒にいた。

ただし、黒い服を着た何人かの男たちが現在進行形でエネコと少女を囲んでいた。

何これ？ どういう状況？

「あーめんどくさい…」

まったくめんどくさい事態を作ってくれたものだ。

「行くよ！ フラメント」

「エル！」

ボールから出てきたのは、男性的なシャープさを彷彿とさせており、

ほぼ人間のような外観を持っている。

また頭部や両肘には鋭利な刃が備わっているのが特徴のポケモンで種族名はエルエイド。

「急いであの二人を助けて」

「エル！」

「な！ 何だてめえらは！」

「構わねえやつちまえ！」

「うるさい。フラメント、サイコカッター」

「エルー！」

鋭利な刃から放たれるカッターのようなもので、男たちを一掃していく。

うん、最近戦っていないから思いつきり実力以上の威力を出しているのは気のせい？

「ヒイ！　ば、化けものだ！」

「ま、魔獣使いだ！？」

「…あゝあゝ」

その後も男たち…いや、おっさん共の言葉は続く。

「あんな化け物従えるなんて…恐ろしい女だ」

「なあ…あんな珍しい奴売れば金になるんじゃないかねえか？」

「違いねえ、おい先にこの女の化け物^{アマ}を捕まえるぜ」

「なあ…おっさん共」

「ああ？　なんだ」

「別にさ、自分のことの悪口とかいいんだよ。

言われるの慣れてるし…でもさー人の家族を化けもの扱いして、
拳句の果てにはあ…、

売るだー？　ふざけてんじゃねえよ、おっさん共。

そんなにお・仕・置・きが、必要みたいだねええ！！！！」

絶対にぶちのめす。

さあて…ストレスの発散に使わせてもらいますか？

「行け…タナトス！」

「グオオオオオオアアア！！！！！！」

竜を模したような姿をしており、背中からは6枚の翼が生えてい

る。

前足となる部分は、顔になっているポケモン。

種族名は、サザンドラ。

ニックネームは、タナトス。

「全部破壊しろ…破壊光線！！！」

「グオオオオオオオオアアア！！！」

3つの顔から、強大な破壊力を持った光線がおっさん共に向かって放たれる。

ドゴオオオオオン！！

鉄骨や屋根が、まるで紙切れ同然のように簡単に破壊されていく。

うん、いい仕事したねタナトス。

煙がはれると、ぼろぼろになったおっさん共が倒れていた。

「グルオオ」

「…もういいよ、ボロゾーキンになったから。」

破壊光線をもろくらってたから、しばらくは動けないね。

フラメントー、生きてるー？」

「エルウ」

「…いつの間に？」

エネコと少女を抱えたフラメントが後ろにいた。

テレポートで移動したの？

よく見てみると少女の体は傷だらけで今にも死にそうな状態である。

別に助ける理由とかないからほっといてもいいよね。

「エルル…」

「ミ…」

「…冗談だよ」

まったく、さすがにそんな外道なことはするわけないじゃん。

…いや、建物破壊とか自分から進んで外道に近いことはしてたけど。

…しょうがない、自宅に帰ろう。

*

「…う」

「やっと目覚めたね」

少女が起きたのは、夕方の5時。

かれこれ4時間は寝てたし。

「…ここはどこなんですか？」

「ここ？ まあ、私の家だ」

実際には、廃墟に勝手に住んでいる不法侵入者だが。

「あ、あの」

「何」っと言おうとしたところで

ギョウウ~~~~

盛大におなかの音が鳴る。

おなかの音をならせたのは少女…。

顔を真っ赤にさせ、両手で顔を覆う。

「……なんか食べる?」

「すみません…ありがとうございます」

以外に少女は、礼儀が正しいようだ。

*

SIDE 少女

「さっさと食べな、冷えたら美味しくないよ」

ずっとトレーを目の前に持つてくる。

目の前には私の大好きなドリアが…。

思わずまたお腹がなってしまう。

わたしは毛布から出てきてスプーンをとり恐る恐る一口食べた。

お、おいしい…！

味もこくなくて凄く食べやすく、ちょっと熱かったけどあつという間に食べ終えてしまいました。

思っていた以上に私は空腹だったようです。

「…全部食ったよ…すごいな…」

驚きというよりは呆れたようにお姉さんは言いました。

…すみません。

「まあ、別にいいけどね。」

で、なんであんなところに倒れてて黒服のおっさん共に襲われてたの？」

黒服のおっさん共？

それはもしかして私を殺しに来た暗殺者たちのことでしょうか？

…まさか。

「…まさか暗殺者たちを倒したのですか？」

「…暗殺者だったの、あれ？」

「知らないで倒したのですか！？」

一般人なのですかこのお姉さん！

「…まあ、正確には、タナトスがやったんだけど」

何でしょう。小声で言っていたのでなにを言ったのか聞こえませんでした。

「で、さっきの質問の答え聞いてないんだけど」

「…それは順を追ってお話します。

私の家には代々伝わる秘宝があります。

それに願い事を言うと、なんでもかなえられるというものなんです。

そして…どこからか聞きつけたのかそれを狙っているマフィアがいたんです。

ロストファミリーという、イタリアで暴動事件などを起こしているマフィアです。

それを手に入れ、自分達の欲望のために願い事をかなえるために奪おうとしたのです。

秘宝を守ろうとしたお父さんとお母さんはそこで殺され…私一人になってしまいました。

秘宝を上げても殺されることは目に見えていました。

死にたくない一心で秘宝を持ち命からがらここ並盛に逃げ込んできたのですが…。

暗殺者を送り込まれ、あの無人倉庫で殺されそうになってしまいそうになったのですが…」

「偶然通りがかった私に助けられたと…」

「はい…。本当にありがとうございました。

でも、本題はここからなんで「却下」え…？」

「どうせ秘宝を守ってくださいとかそういうこと言っただけでしょ。

嫌だね、私に対してメリットがない」

やはり…当然の答えですよ。

「そ、そうですよね…すみま「ああ、でも」…え？」

「私の家族に化けものや売ろつだと言った奴らなんだから…責任は取ってもらわないとね」

家族…？

それはいったいどの方のことなのでしょう。

「あ、あのそれはいい」

「ああ、実はおっさん共をやったのは」

そういってお姉さんは腰につけてあったボールを投げると、

ボールの口が開き竜のようなものが出てきました。

「グゴガアアア!!」

「こいつなんだよね」

魔獣…でしょうか？

すごい小さいです。

「大きいです…!!」

「いつとくけど、化け物とか言ったら容赦なく叩き潰すから」

「は、はい…」

「嗚呼…あとなんかお金とかある?」

お金ですか。

「はい…一応」

「とりあえず人に物を頼む時はそれなりの代価を払わないと私動かないから。」

一応ってことはあるんだね。 後で払ってくればそれでいいよ。

ところで名前はなんていうの？」

ひいらぎかざね
「柊華実です」

「私は、神埼玖惹。呼び方は何でも良いよ。

じゃあ…案内してよ。ロストファミリっていう屑マフィアの本拠地さ」

この時のお姉さんの表情は…なぜかとてもすごく黒い笑顔になっていました。

助けてみた（後書き）

フラメンスは誓いという意味です。

主人公のキャラは、キレると口調がやや変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8119x/>

魔獣使いは我が道を行く

2011年12月1日15時52分発行